

クレセント×シグニット劇場晒し

観葉植物くん.room3

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

とある場所で行つた劇場を加筆修正したものです。

何か問題があれば、感想やメッセージでご連絡ください。連絡に気付き次第対応します。

クレセント×シグニツト劇場晒し

目

次

# クレセント×シグニット劇場晒し

「ねえ、おねえちゃん」

シグニットが顔を俯かせたまま、不意に声を発する。

「おねえちゃんって、指揮官のこと、好きなの？」

「はつ、えつ!? そ、そそそ、そんなことあるわけないでしょ!」

突然の問い掛けに、私はしどろもどろに答える。

顔に熱が集まっているのが、自分でも分かる。これでは、岡星だと自白しているようなものだ。

「やつぱり、そうなんだ……」

私の態度から察したのだろう、シグニットはそう言葉を漏らした。

「じゃあ、うちは?」

続けて、私に問い合わせる。

「うちのことば、どう思つてる?」

シグニットが、俯かせていた顔を上げる。

私を見つめるその眼差しには、いつものおつとりしたものとはまるで違う、何か覚悟を決めたかのような、とても力強いものが宿つていた。

思わず、一步引き下がってしまう。

「ど、どうつて、大切な妹だと思つてゐに決まつてゐじやない」

「……やつぱり、おねえちゃんにとつてうちは、ただの『妹』なんやね」

一拍、間を置いて。シグニットは、口を開いた。

「うち、おねえちゃんのことが好き。姉妹としてじやなくて、恋愛対象として」

私を見つめるその瞳は、真剣で、とても嘘を言つているようには見えなかつた。

突然のことに呆然とし、動けずに入り私の近付くと、シグニットは私の肩を掴み、そのままベッドへと押し倒した。

「おねえちゃんが、指揮官のこと、本当に好きなのは知つてゐ。だから、おねえちゃんの心が欲しいだなんて我が儘、言わへん」

だけどな……

「身体は、うちのものにさせて……」

いつも表情豊かで、私たちの心を明るくしてくれるシグニットの顔には、今、能面のような『無』しかなかつた。

だけど、その『無』の中に、悲しさや、寂しさが見えたような気がして——

——結局私は、抵抗せず、されるがままになつた。

「おねえちゃん……」

シグニットが、私の服のボタンに指をかける。

そして、私の服をはだけさせると、鎖骨に口付け、そのまま、力強く吸い付いた。

「んっ……」

僅かな痛みに、顔がしきみ、声が漏れ出る。

シグニットが顔を離すと、そこには赤い痕がついていた。まるで、この身体はうちのものだと主張するかのように。

「ぺろっ、んちゅ、ん……」

シグニットの熱を帯びた舌は、鎖骨から、私の右胸へと移動していく。

「あっ、んう……ひゃうっ……」

その熱が肌を這う旅に、私の身体は敏感に反応し、嬌声を上げてしまう。

そして、とうとう丘の頂きに到達したシグニットは、すつかり硬くなつてしまつた蕾を口に含み、舌で転がすようになめ回した。

「んんっ、それ、駄目っ……」

鳴かされながらも、どこか冷静な頭で、思考する。

——ここで、止めるべきなのだろう。

これ以上一線を越えてしまう前に、シグニットを突き放す。そして、以前と同じ、『ただの姉妹』に戻る。きっと、それが正しい行動だ。だけど、あの時。

彼女が見せたあの『無』の表情が、頭を過る。

彼女を拒絶してしまえば、大切な『なにか』が壊れてしまうような気がして。

それが、私の身体から、抵抗する意志も、気力も、奪っていた。シグニットは、私の右胸の頂点を苛めながら、空いた手を使い、私の左の膨らみをさわさわと撫で回す。

「ねえ、おねえちゃん……」

そして、口を乳頭から離したシグニットは、私の左胸——調度、心臓の真上の位置に手を置きながら、私に語りかけた。

「おねえちゃんの心臓、凄くドキドキしてるね……」

シグニットは、そつと私の手を取ると、それを自らの胸に押し付けた。同じ姉妹なのに、私とはまるで違う、豊かな乳房。

「うちもね、今、凄くドキドキしてる」

分厚い脂肪の壁に阻まれている筈なのに、私の手の平には、確かに彼女の脈拍が伝わってきた。それは自己申告の通り、かなり早いテンポを取つていた。

手慣れているのかと思いつや、シグニットも、ひどく緊張しているらしい。

そこで、やつと理解できた。

目の前にいるのは、いつもと違う彼女ではない。

いつも通りの、何をするにも自信がなくて、人を傷付けることを嫌う、臆病で、優しい彼女なのだ。

「……」

私は無言でシグニットの服のボタンに手を伸ばすと、手早くそれを外す。

更に、ブラのホックを外して彼女の胸を露にさせると、勢いそのままで、彼女を抱き締めた。突発的な事態に対応できなかつたのだろう。シグニットは、されるがままにされていた。

「……おねえちゃん……？」

何テンポか遅れ、やつと出てきたシグニットの声には答えず、そつと、彼女の頭を撫でる。

密着した胸から、互いの鼓動が伝わり合う。

最初は異なるリズムを刻んでいたそれが、徐々に同調し、一つのリズムになっていく。

シグニットが不安そうにしていたときや、緊張していたとき、私はいつも、こうして彼女を落ち着けていた……流石に、裸で胸を密着させたことは無かつたが。

暫く、無言で彼女を抱擁した後——

「シグニット……」

私は、そつと口を開き——

「私は、指揮官のことが好き……そして、あなたに、姉妹として以外の愛情を向けることはできない」

——残酷な言葉を投げ放つた。

「……」

シグニットは、なにも言わず、私の次の言葉を待っていた。

「あなたが私のことを諦めるのならば、私は今日あつたことを全部忘れる。そうすれば、私たちは今まで通りの、ただの仲良し姉妹に戻れる」

「……」

シグニットは、まだ、沈黙を保っていた。

「シグニット、あなたは……私を、諦められる？」

「無理、だよ……」

震え声で、シグニットが答える。

「ずっと、ずっとおねえちゃんのこと好きやつたから……」

密着しているため、私はシグニットの顔を見ることが出来なかつたが、彼女がどんな顔をしているのかは、容易に想像できた。  
「諦めるなんて、無理だよお……」

私の肩に、ポツリと、水滴が落ちる感触がした。

本当は、気付いていた。けれども、私はずっと、目を背けて、気付かないふりをしていた。

シグニットが、覚悟を決めて、私に想いをつげた時点で——

——もう、『ただの姉妹』に戻ることなんて、出来なくなつてしまつたのだ。

「ごめんね、シグニット」

私はそう言うと、抱擁を解く。

それから、シグニットの肩に手をかけ、体重を前にかける。

押し倒されたシグニットは、ポカンとした顔をしている。多分、最初に押し倒されたときの私も、こんな表情を浮かべていたのだろう。「私は今から、あなたにとても酷いことをする」

シグニットの目尻についた涙を、ペロリと舐め取る。

「おねえちゃん、なに言つて……んん!?」

そして、疑問の声を発しようとして開いた彼女の唇を、私の唇で塞いだ。

唇を合わせていた時間は、僅かなものだつた。

それでも、シグニットを黙らせるのには十分な効果があつたようで、顔を離すと、彼女は声を失つたように、ただ呆然としていた。「私は、あなたを突き放すことが出来ない……だけど、指揮官への恋慕を諦めることも出来ない」

シグニットの頬に手を当て、彼女の目を真っ直ぐに見つめる。

「だから、あなたとは身体だけの関係」

結局は、シグニットが最初にやろうとしていたことと同じだ。

もう、『ただの姉妹』という繋がりが壊れて使えなくなつてしまつた2人を、心ではなく、身体で無理矢理繋げる、愚かで、間違つた手段。「ごめんね。私は馬鹿だから、あなたを突き放さない方法が、これしか思い付かなかつた」

倫理的には、ここで彼女を突き放すのが正解なのだろう。

それで2人の関係が消滅してしまつたとしても、いつ崩壊するかも分からない、間違つた関係を続けるよりは、遙かにマシだ。けれど私は、シグニットと——大切な『妹』と離れることに、耐えられない。

自分勝手な理由で、彼女の心を傷付け続ける関係を築こうとしている。

だから——

「ごめんね、酷いおねえちゃんで」